

だれもが主役のまちづくり（提言）

**～人がつながりあう「地域力」が、
あきる野の香りがする「あきる野っ子」を育てる～**

平成30年4月

第11期あきる野市社会教育委員の会議

目 次

【1】はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
【2】提言に向けての調査・・・・・・・・・・・・・・・・	3
【3】子どもの成長に関する地域の役割と現状	4
【4】子どもの成長に関する家庭の役割と現状	8
【5】あきる野っ子を育てる「郷育」の実現に向けて・・・	16
【6】おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
<資料>・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・.....	24

【１】はじめに

第１１期あきる野市社会教育委員の会議では、あきる野市が重点施策として取り組んでいる教育・子育て支援を軸とし、第８期から綿々と紡がれてきた子どもたちの健全育成と地域や大人の役割に関する提言を受け、２年にわたる会議において、地域のあり方や子どもたちに与える影響などについて議論を重ね、調査研究を行ってきました。

第８期 ： 地域で生き抜くための生涯学習
 ～体験を通じて生き抜く力を育み地域力アップへ繋げる～

第９期 ： 大人・子どもの全てが輝くまちづくり
 ～次代を担う子どもたちの健全育成、特に生きる力の育成のために～

第１０期 ： 人と人がふれあい、つながるまちにするために
 ～見つけよう我がまちの良さ、伝えよう子どもたちに～

提言書で掲げられた地域や子どもたちの成長に関する課題解決や未来の実現に向けては、「大人が手本のあきる野市」にあるとおり、成人である私たち「大人」が現状を諦めることなく積極果敢に行動し、「できることを、できるときに、できる限り」実践し、子どもたちの手本となることが大切です。大人として、やらなければならないことが山積している現状がありながらも、地域や人と触れ合いつながっていくことは、この地域の魅力である「人」を輝かせるものとなるでしょう。また人のつながりは、この地域の持つ大きな力であり、それが子どもたちの成長を願い行動することで、学校や家庭と共に、子どもたちを逞しく育てる大きな役割があると考えています。

本提言書では、近年叫ばれている地域や家庭における現状と課題を調査しました。また、それらとこの地域の現状と照らし合わせることで、我がまちの可能性を再確認し、地域で子どもたちを育てる「郷育」の実現に向けた一歩につなげることにしました。

具体的な一歩を考えるにあたり、市制施行２０周年の際、子どもたちの声を集め、策定された「みんなのふるさとのまち・あきる野」子ども宣言に着目しました。特に３番項については、この地域に生きる大人一人ひとりがどのように地域や他者と向き合い、つながって生きていくべきかを教示してくれています。

学校、家庭の中の大人だけが子どもにとっての大人でなく、宣言にある「他者のために、他者と共に」つながり合い行動できる地域の大人が、子どもたちの目指す「公（おおやけ）」の大人ではないかと考えます。

「みんなのふるさとのまち・あきる野」

子ども宣言

私たちの住むあきる野市を、帰ってきて落ち着けるまち、そして誇りに思えるまちとして、未来の子どもたちに贈り届けられるよう、合併して20年の節目の年に次のことを宣言します。

一： 古くから伝わる素晴らしい伝統文化を受け継ぎ、
学び、大切にしていきます。

一： どの季節でも楽しめるあきる野の自然と、
そこに生息する貴重な動植物を守っていきます。

一： まちで挨拶をしてくれたり、優しく見守ってくれる地域の人たちを
誇りに、子どもたちのお手本となれる大人になります。

2015年8月30日策定

【2】 提言に向けての調査

1. 調査の背景

我がまちの教育を語るには、今の子どもたちの生活の現状やそれを取り巻く家庭や地域社会の現状はどうなっているか、家庭・地域社会の役割と連携はどのようにあるべきか、そして、様々な課題が存在する中、それらの解決に向けて我がまちではどのような地域性のある教育が必要になるであろうかを検討しました。

～子どもたちの生活～

今日を迎えるにあたり、戦後からの様々な経済的成長、交通・情報通信システムの急速な整備など、様々な分野における進歩・発展は、私たちの社会を大きく豊かにしました。その結果として、私たちの生活水準は向上し、生活は便利になりました。またそれに伴い近年では都市化、核家族化、少子化、地縁的なつながりの希薄化など家庭や家庭を取り巻く社会状況も大きく変化し、人と地域、人と人がつながり合う力が弱まっています。

このような社会全体の大きな変化の中で、子どもたちの生活・教育環境も大きく変化しました。教育は広く普及しただけでなく、高い学歴志向等に支えられて高等学校・大学への進学率は急激な上昇を見せています。しかし、個々の家庭において、日々の生活や情報などが充足する時代となり、そこから派生する生活様式や価値観、教育力の変化、子どもたちの遊び方の変化などの影響を受け、子どもたちを包み込む生活そのものも大きく変化することとなりました。

このようにして、現在の子どもの生活を見ていくと、取り巻く家庭や地域社会について様々な教育上の課題が生じてきているが、山積するこれらの課題を憂えているわけにはいかず、いかに前向きに変化させていくかを本提言書では述べていきたいと考えています。

2. 調査の目的

本会議では、「子どもの成長や自立、社会で生きていくために必要な要素が、学校や家庭だけでなく、地域や他者とのつながりの中にも存在する」との仮説を立て、地域や家庭の役割や現状、課題を調査研究しました。その上で、この地域の可能性である「共助できる人」を基に、「市民一人ひとりがかかわりあい、つながりあい、ささえあう」を大きな柱として、個から公への意識が変化し、地域でつながり、子どもを育てる「郷育」の実現に向けた一歩を生み出すことを目的としました。

【3】子どもの成長に関する地域の役割と現状

1. 子どもの成長に関する現状とその社会背景

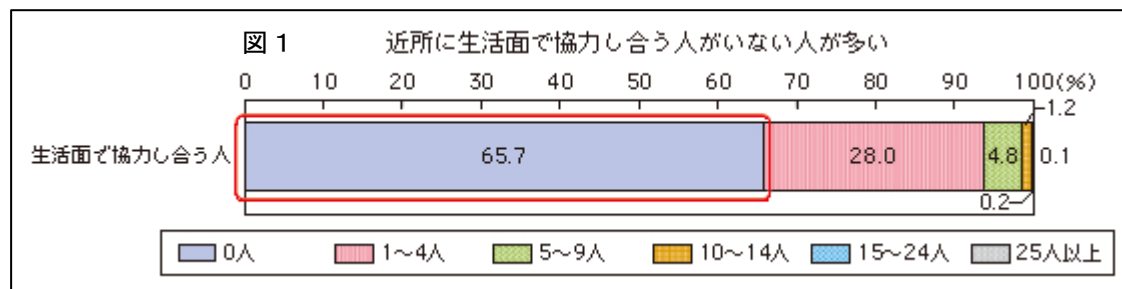
近年の子どもたちの傾向として、「基本的な生活習慣が身についていない」「他者との関わり方や相手の気持ちや立場を思いやる力が弱く、自制心や耐性、規範意識も十分に育っていない」「運動能力が低下している」等が指摘されています。

- ・ 平日23時以降に就寝する小学6年生の割合は19%、
平日24時以降に就寝する中学3年生の割合は31%
- ・ 朝食を食べないことのある小・中学生の割合は、
小学6年生で13%、中学3年生で19%
- ・ 平日にテレビやビデオ・DVDを3時間以上視聴する子どもは
小学6年生で46%、中学3年生で39%となっている。

文部科学省「平成20年度全国学力・学習状況調査」より

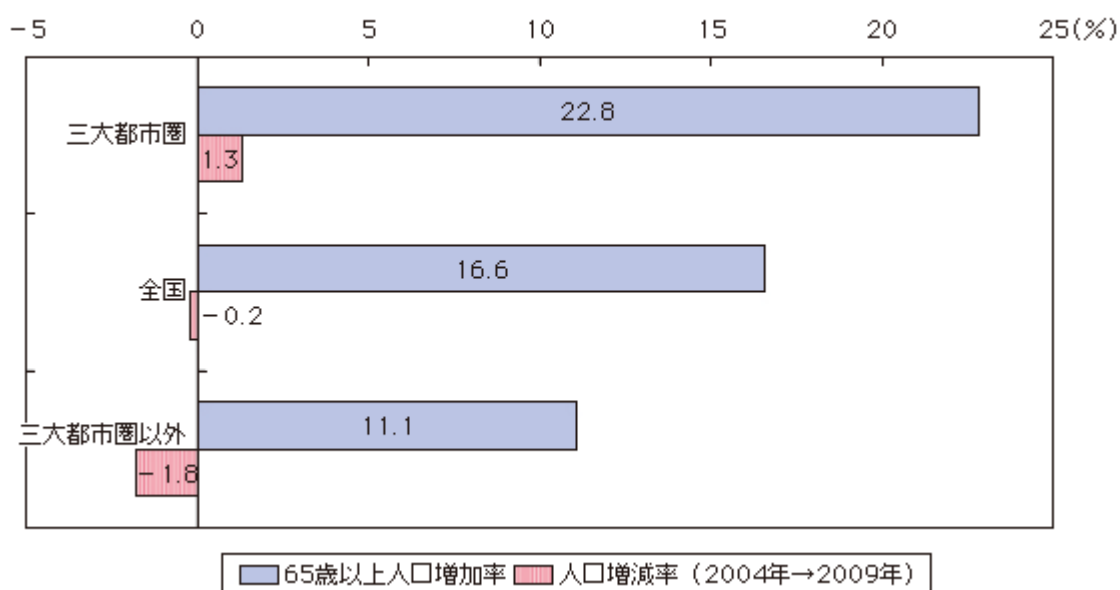
また、睡眠や食生活などの子どもの生活習慣の乱れは、健康の維持に悪影響を及ぼすだけでなく、生きるための基礎である体力の低下、ひいては気力や意欲の減退、集中力の欠如など精神面にも悪影響を及ぼすとの結果も出ており、小中学校では、児童・生徒が学習に集中できなかったり、人の話を聞けなかったりして授業が成り立たず、学級崩壊という状況に陥ることも少なくありません。

さらに、社会の傾向として、少子化や核家族化・都市化等(図2)が今も進行しており、その結果として個人や家族の価値観が多様化し、人間関係や地域におけるつながりの希薄化(図1)、さらには経済性や効率性を求める風潮の高まり等が多くの方面から指摘されています。このような社会的傾向が、社会における子どもの成長や家庭における親の子育ての考え方にも大きく影響を与えていると考えられます。



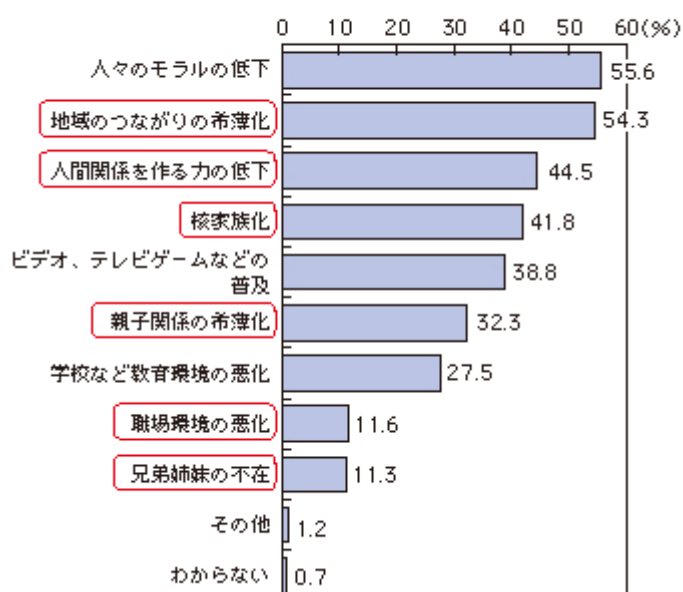
内閣府「平成19年版国民生活白書」より

図2 三大都市圏とそれ以外の道県の高齢化と人口増減率(2004 年、2009 年比較)



総務省「人口推計」より

図3 人間関係が難しくなった要因



内閣府「安全・安心に関する特別世論調査」(平成 16 年)により作成

子育てには、大きく分けて地域社会における教育と家庭における教育の二つがあります。子どもが成長し自立する上で、成功などのプラス体験と挫折などのマイナス体験は、ともに何度も繰り返し経験していくことが必要ですが、社会の少子化や核家族化は、子ども同士が集団で遊び、時にはぶつかり合いながら成長し合っていく経験を失わせています。

都市化や情報化は、子どもたちから自然体験などのような屋外で遊ぶ経験を失わせています。一方で、テレビゲームやインターネット等の室内での遊びやVR体験が、子どもたちの遊びの中心になってきています。また、地域ではご近所付き合いなどのつながりの希薄化によって、大人が自分の子どもにばかり目を向けて、地域の子どもたちに関心を持たず積極的に関わることもなくなっています。

しかしながら、我がまちにおいては、地域の団体や大人たちが主体的に関わることで様々なつながりが生まれ、維持されています。

2. 地域で行われている子どもに関わる活動

あきる野市の各小学校区には、青少年健全育成地区委員会が組織されており、夜間パトロールや祭礼などでの非行防止パトロール、地域の歴史や施設等を知るウォークラリーと終了後の焼きそばや豚汁などの仕出しを通じて、地域の親子の交流の促進に努めています。

一方、中学校では地元の企業や商店、幼・保育園や公共施設の協力を得て、職場体験に取り組んでおり、生徒たちの勤労観・職業観の育成やコミュニケーション能力などの社会的スキルの向上に努めています。

あきる野市では、青少年顕彰ふるさと委員会によって、ちょっとした善行（小さな親切）を行った子どもを称える青少年善行表彰が毎年行われていますが、地域によってはこのような子どもを独自に表彰しているところもあります。近年、地域との関係が希薄になっていると言われる中で、幸いにあきる野市はまだ地域の伝統行事や伝統文化への子どもたちの参加が少なくありません。五日市地区の祭礼における中学生神輿は長い歴史を持ち、準備、進行、最後のまとめまで中学生たちが主体的に行い、保護者や地域の大人がそれを支えるという関係が続いています。規模や歴史は違いますが、同じようなことが他地域でも行われていたり新しく生まれたりしていることは、我がまちの可能性を感じます。

3. この章の終わりに

子どもたちの生活環境、生活様式は、社会の変化と共に変化を遂げました。しかしながら、その変化は「個」の充実をもたらす一方で、「公」の希薄さを生み出していると考えます。改めて、地域社会の現状や課題を踏まえ、我がまちの取り組みを研究してみると、その存在は非常に大きいものです。特に、我がまちにおける子育てに関わる地域の人的資源には、私的なボランティア活動と町内会など組織的な活動を含めると多くの組織や団体があり、その活動も多岐にわたっています。大人が子どもを支えることは、この地域の魅力として、大いに誇るべきものと言えるでしょうし、今後も維持して行くことが大切です。

子どもの成長を育む地域とは、特別な組織や制度を持つところである必要はなく、一人ひとりやご近所同士や身近な仲間・知り合いといったような普通の存在が、当たり前のことを当たり前に行ったり、それを称えたりといったことが自然に行われている地域ではないでしょうか。

上からの押し付けではなく、その地域に暮らす人たちが自ら考え、行動し、全員で積み上げて行くような地域活動がこれからの方向性だと考えます。

地域の見守り活動の例

平沢地区

1. 町内会事業として登校下校時の見守り活動をしている。
2. 下校時の子どもたちの安全を見守ることが主な目的である。
3. 登録は16名となっている。
4. 屋城小地区・2名、東秋留小地区・9名が、特にスケジュール調整などはせずに自分の出られるときに出ている。

屋城小学校区

1. 町内会等とは関係なく、私的なボランティアの方々30名ほどで平成17年にスタートした。
2. 親世代は登下校時には参加が難しく、リタイアした方々（地域の高齢者）でスタートし、現在もその状態である。年月とともに高齢化も進んではいるが、現在も11名が活動を継続し、見守りを行っている。
3. 登下校時だけでなく、常に子どもたちの様子に目を向けるという意識を持つことをボランティア全員に徹底している。
4. 学校の目標に「防犯安全ボランティア等との毎月一回の情報交換」を設定していて、駐在所の警察官、スクールガードリーダー、校長、副校長等との情報交換が長年継続している。
5. 見守りの時だけでなく、子どもたちが町で出会った時にも挨拶をしてくれることは見守り活動をしているの大きな喜びである。



【４】子どもの成長に関する家庭の役割と現状

1. 家庭の役割

家庭教育は、すべての教育の出発点です。

東京学芸大学教授の岩立京子氏は、以下の「家庭が担う３つの役割」を挙げています。

（１）安心・安全な居場所

家庭の役割の中で最も基本的なことは、子どもの健康を願い、３度の食事を用意し、着るものを着せ、安心して眠れる安全な場所を提供することです。これらは人間が生きるための基本的欲求で、家庭はこの欲求を満たす第一の場となります。

（２）愛情や信頼関係を育てる

家庭は、子どもをまるごと無条件に愛し、何かあったときに守る場所です。愛され、守られているという実感を持つ子どもは、そうしてくれる家族に対して、同じような愛情や信頼感を寄せるようになります。

（３）価値やルールを伝える

家庭内であっても、気持ちよく暮らしていくためには、守らなければいけないルールや秩序があります。相互に配慮し、思いやり、時に自己コントロールすることの大切さを、その子の成長にふさわしい形で伝えていきます。

家庭は、そこでのふれ合いを通して、子どもが基本的な生活習慣や生活能力、人に対する信頼感、豊かな情緒、他人に対する思いやり、基本的倫理観、自尊心や自立心、社会的なマナーなどを身に付けていく上で重要な役割を果たしています。以下、いくつかの役割を具体的に述べます。

①家族との人間関係を作る

子どもが初めて人間関係を意識するのは家庭内です。新生児の頃から人の表情を見分けたり、表情の違いを判別したり、音を聞き分けたり、極めて高い能力を発揮します。そのため、新生児の頃から言葉をかけることや温かい表情を向けることが重要と言えます。家庭内から共同の場、社会生活へと年齢を重ねるごとに資質を身に付けていくことにつながると考えられます。親が愛着を持って子どもと関わり、一人の人間としての存在を尊重し、しっかり付き合うことが大切です。そして子どもは、温かい人間関係の中で豊かな感性や人間性、自立心を育み、他者への愛情を持ちます。人生で出会う初めての人は親であるため、親が積極的に子どもと関わる機会を増やし、言葉をかけることや温かい表情をかけることが、家庭の役割と言えます。

②子どもの行為に応答する

子どもが話しかけてきたらきちんと答える、大人から話しかけるなどの意思疎通により、

他者認識を深めさせることが必要と思われます。他者を意識できるようになることで、社会生活に適応していけるのではないのでしょうか。また、親が自分の言葉で、仕事に対する思いを話すことや、子どもの将来について話し合うことが、子どもには良い刺激になるのではないかと考えられます。子どもの問いかけに反応し、たくさん語りかけることが大切です。

③生活習慣を身に付けさせる

生活習慣を身に付けさせることは、家庭内が始まりだと考えられます。学校へ行くようになれば、時間割があり、休み時間・給食時間などが決まっていますが、そのスケジュールが円滑に遂行される前提に、家庭で身に付けられた習慣があると思われます。決まった時間に起きる、決まった時間に寝るなど、時間で動けるような習慣を身に付けておくことが必要だと考えられます。また、食習慣も健康に関わるものであり、人間が生きていく上でとても大切なものです。このような習慣は自然に身に付くものではなく、意識して身に付けさせていくものです。挨拶も、家庭のやりとりの中で日常的に身に付けていくことで、社会生活に対応していけると考えられます。

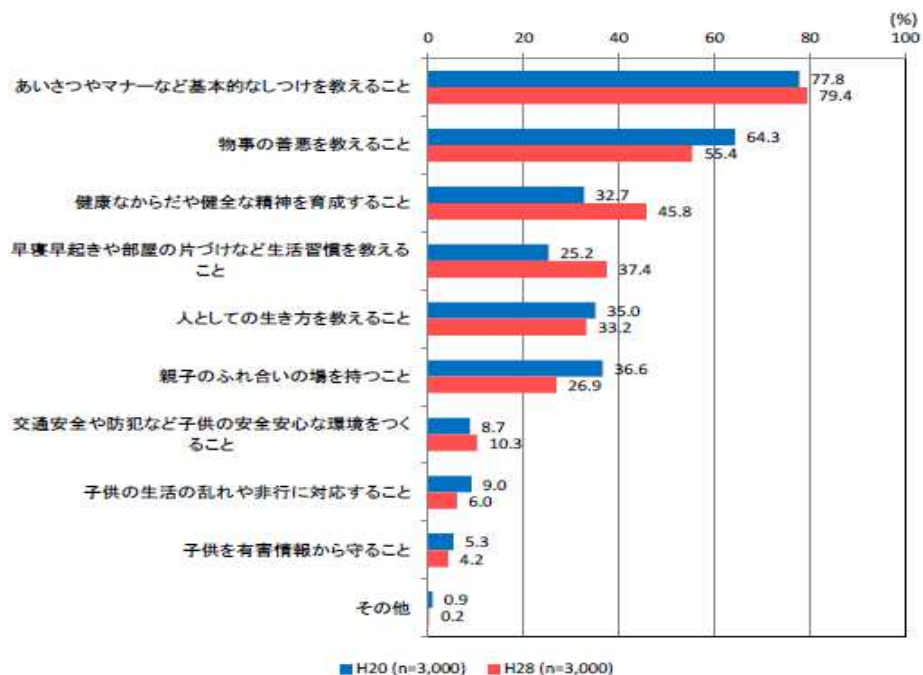
④役割を持たせる

学校生活だけでなく、社会生活でも共同作業が大切なことに間違いありません。共同作業の中には必ず役割分担があり、家庭でもあるはずです。子どもに、家庭の中で手伝いなどの役割を与え、責任感を持たせることが必要だと思われます。

以上の4つの役割が果たされにくくなったのは、仕事や家庭環境などにより身体的、精神的、経済的など、数多くの背景があります。また、虐待のみならず、核家族化や地域行事への不参加など、子どもが小さいうちに大人と関わる機会が徐々に減っています。家庭教育を充実させるためには、人との関わりの場を多く設定することや行政による支援などが、核家族やひとり親家庭に必要と考えられます。このような家庭が増えた現代では、世代間で子育ての考え方を継承することが困難であり、行政や地域が担う役割が増加しています。次ページの図4や図5に挙げられている項目を実践できる大人が増えていくことが必要な社会だと言えるのではないのでしょうか。

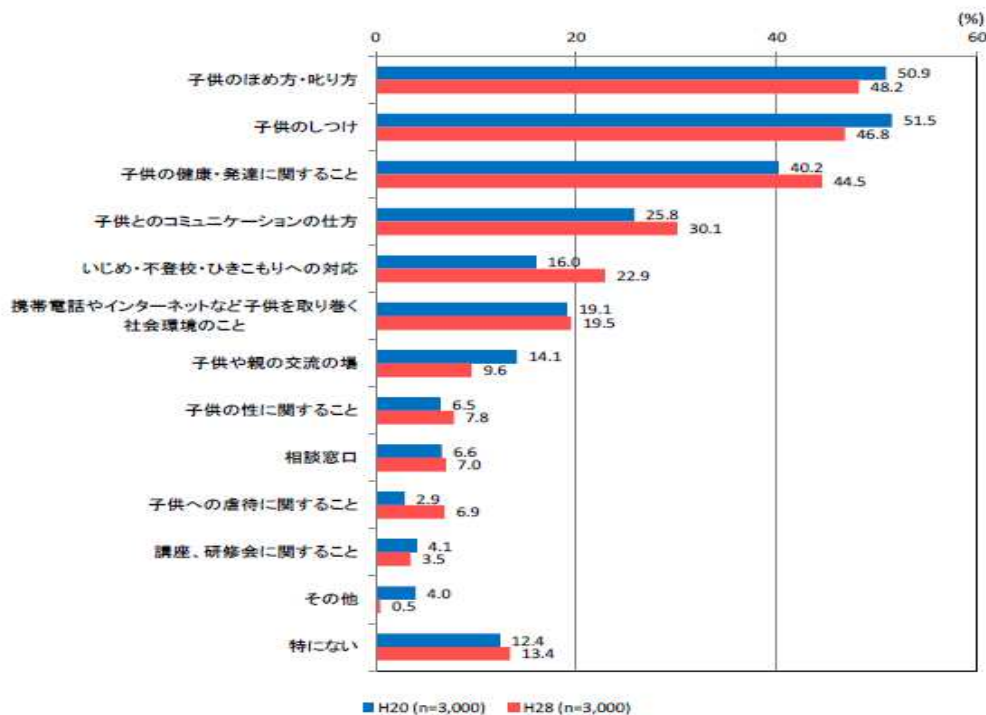


図4 あなたは、家庭教育の充実のために、家庭は主にどのようなことに取り組むべきだと思いますか。重要だと思う順番に3つまでお答えください。(複数回答として集計)



※1～3番目の回答を複数回答として集計したため、各選択肢の割合を合計しても100とはならない。

図5 あなたは、家庭教育について、主にどのような情報を知りたいですか。知りたい順番に3つまでお答えください。(複数回答として集計)



※1～3番目の回答を複数回答として集計したため、各選択肢の割合を合計しても100とはならない。

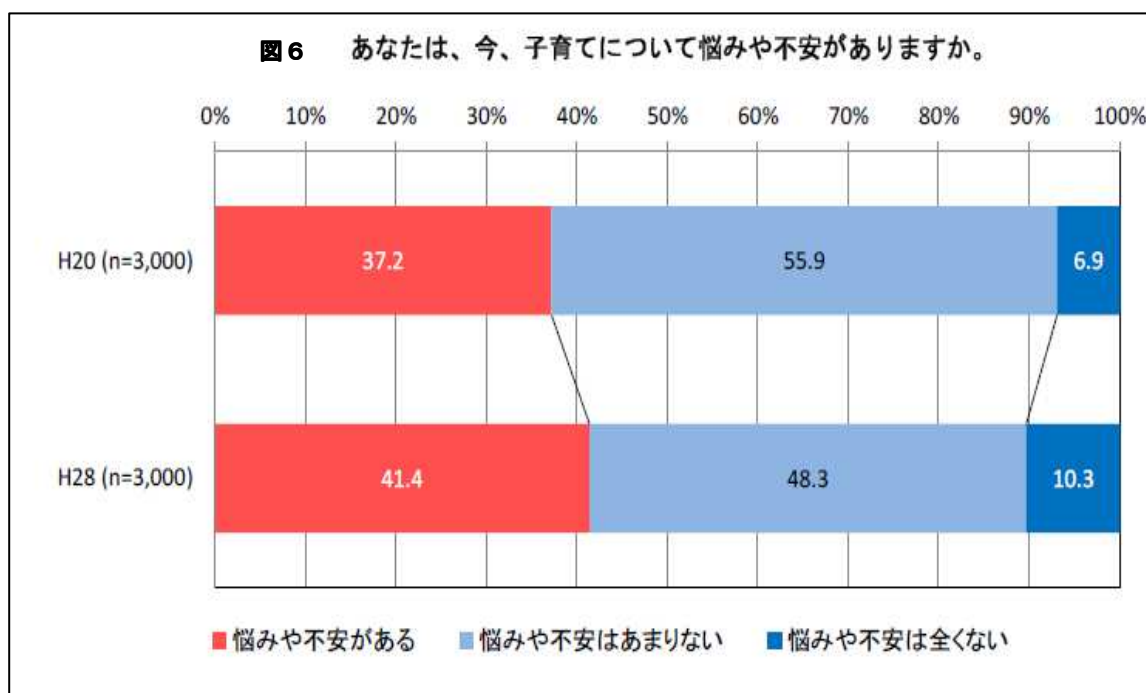
2. 家庭の現状

子どもの教育の第一義的責任は親が持つものであり、尊重されなければなりません。

しかしながら、子どもは家庭の中だけで育つわけではありません。学校や地域の様々な人と関わり、見守られながら成長していきます。

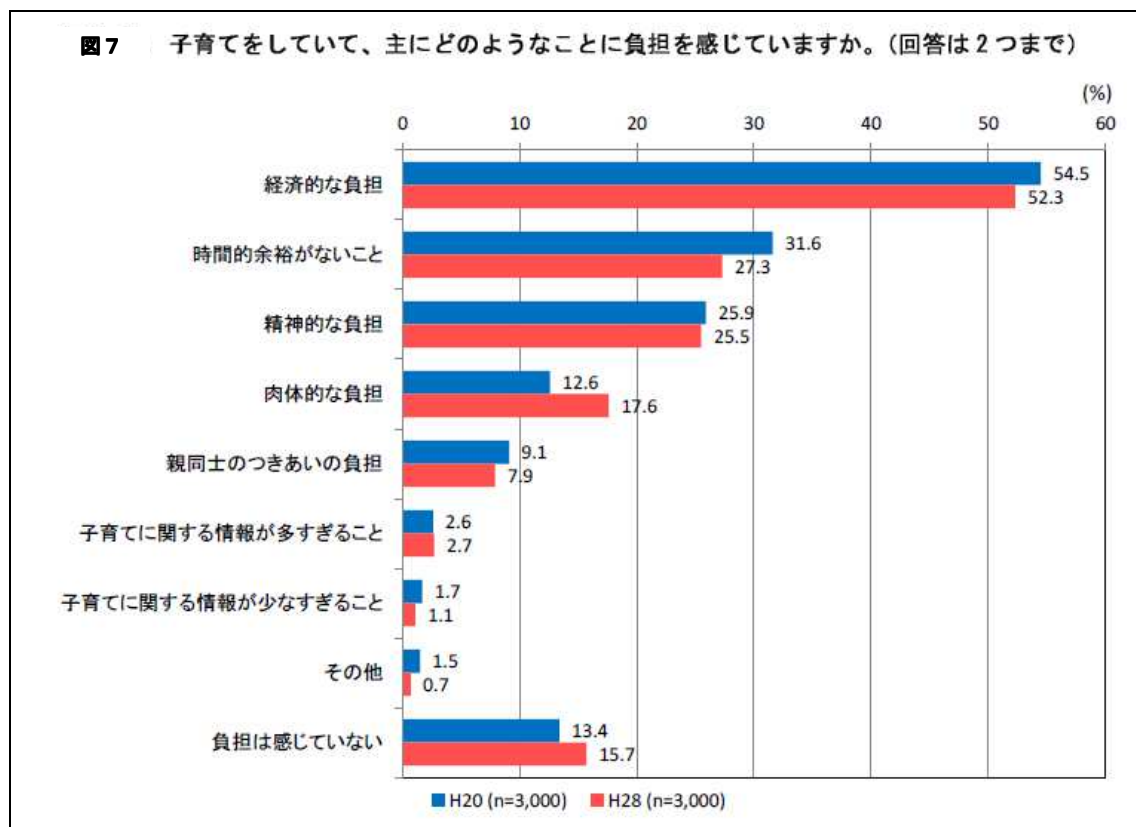
かつては、親以外にも多くの大人が子どもに接しながら家庭教育を担い、親同士や地域の人とのつながりによって、親として学び合い、育ち合う中で、子どもたちを「地域の子ども」として育て合うなど、地域で子育てや家庭教育を支えるしくみや環境がありました。

近年は、都市化や核家族化、少子化、雇用環境の変化などにより、こうした地縁的なつながりや人との関係が希薄化しています。親が身近な人から子育ての仕方を学ぶ機会が減り、父親の単身赴任や仕事中心のライフスタイルに伴い、父親の存在感の希薄化、子育ての悩みなど気軽に相談できる人がそばにいないという親や家庭を取り巻く状況、子育てを支える環境が大きく変化しています。



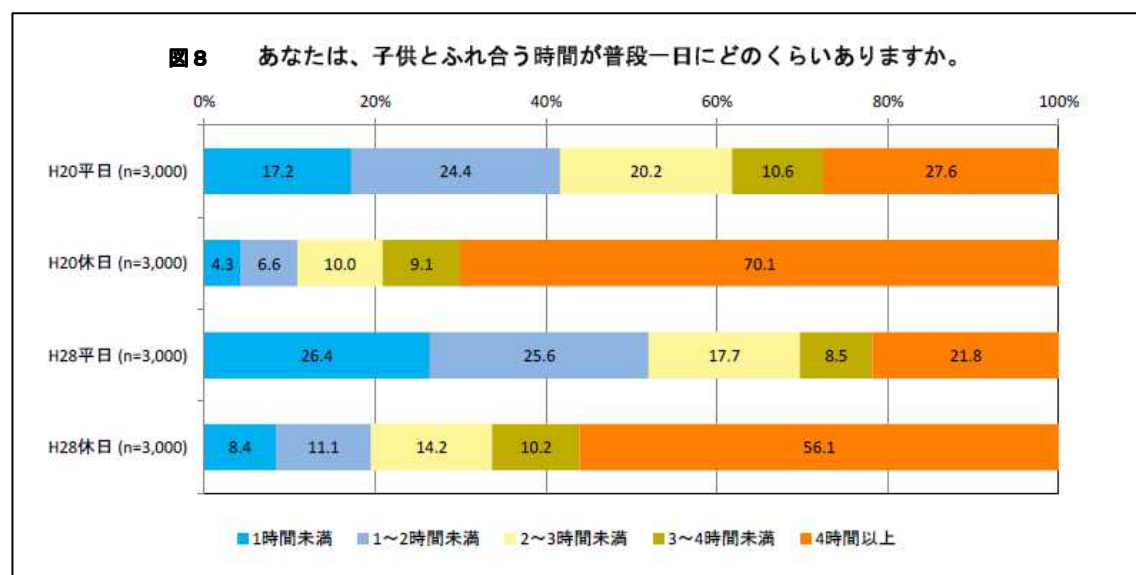
<文科省資料 平成28年度「家庭教育の総合的推進に関する調査研究～家庭教育支援の充実のための実態等把握調査研究～」より>

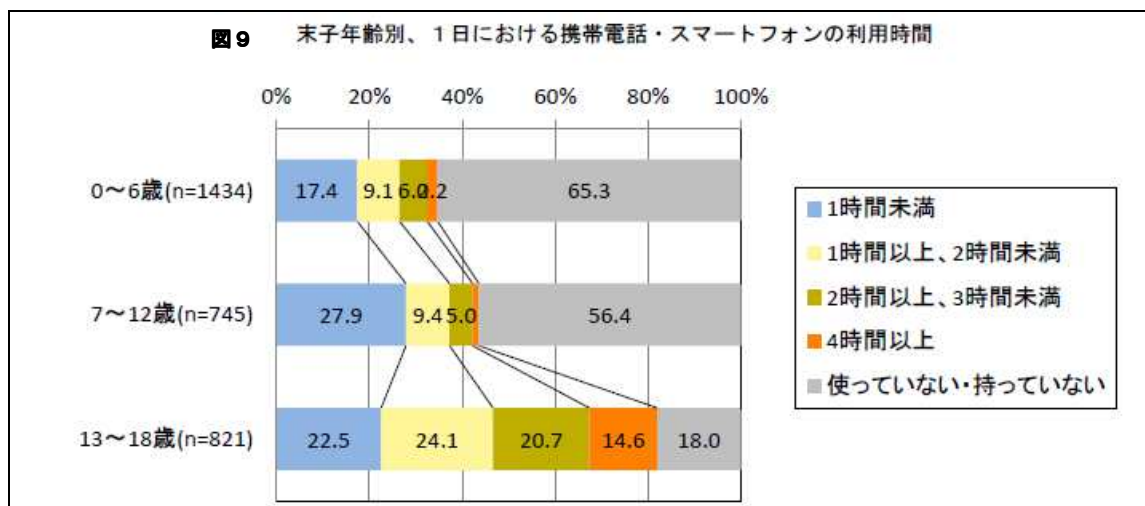
また、女性の社会進出にもかかわらず、家庭と職業生活を両立する条件整備の遅れなど、様々な要因を背景として、家庭の孤立化や時間的・精神的ゆとりのなさをはじめ、家庭教育の充実に向けては課題が山積しており、それによって家庭教育に対する親の自覚不足、親の過保護や放任など、家庭をめぐる問題も深刻化してきています。



<文科省資料 平成28年度「家庭教育の総合的推進に関する調査研究～家庭教育支援の充実のための実態等把握調査研究～」より>

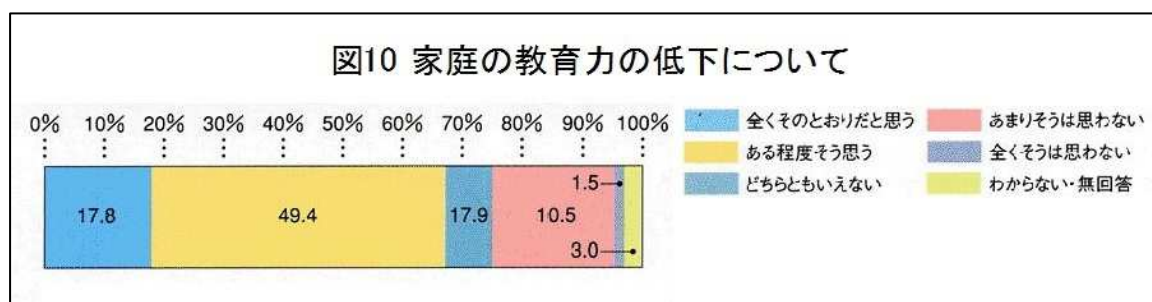
その一方で、子どもたちが育つ環境が変化し、子ども同士が集団で遊びに熱中したり、時には葛藤しながら互いに影響し合って活動したりする機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われています。都市化や情報化の進展によって、子どもの生活空間の中に自然や広場などの遊び場が少なくなる一方で、テレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされています。





<文科省資料 平成28年度「家庭教育の総合的推進に関する調査研究～家庭教育支援の充実のための実態等把握調査研究～」より>

こうした状況は、決して個々の家庭だけの問題ではありません。保護者の皆さんが安心して子育てや家庭教育ができるよう、改めて家庭教育の大切さを社会全体で考え、支援していくことが大切です。



<国立教育政策研究所「家庭教育研究会」『家庭の教育力再生に関する調査研究』(平成13年)より>

白梅学園大学学長・東京大学名誉教授の汐見稔之氏は「子育て支援の最も根本的な問題というのは、今なぜ子育てが難しくなっているか、なぜ子育てを支援しなければいけなくなったか、そうした一番根本的な原因認識が共有されていないことにある。それは『放牧と厩舎型の子育て』という人類が長くやってきた子育ての最も基本的な方程式が成り立たなくなったこと、『放牧と厩舎型の子育て』が崩壊してきたということ、これが様々な子育ての困難の一番根本原因ではないか」と言っています。

『放牧と厩舎型の子育て』とはどういうことかを要約すると、これまで私達人類は、食べていくのに必死で家事や野良仕事に多大な時間を生活の中で割き、必ずしも朝から晩までずっと子どもの傍らについて育てるということはやったことがなく、子どもがある程度自分で動けるようになれば、「外で遊んでおいで。おばあちゃんのところに行っておいで。」という形で外へ出し、家の近隣の地域社会に放り出して、地域の子育て力に依存して育てるということが、これまでの人類の育て方の基本だったこと、そして、食事時や夕方にな

ると親は自分の子どもを呼びに行き、子どもたちはお腹が空いたら帰ってくる。これを「厩舎に戻る」と言い、この厩舎では、子どもは食事作りの手伝いや様々な仕事があり、包丁の使い方などを身につけつつ、自分も協力して作った食事のおいしさや、だんだん上達する料理作りの嬉しさなどを通して、親子の実体験に基づいた共感の言葉が子どもを育てる。こういう育ち方を、汐見氏は『放牧と厩舎型の子育て』と比喩的に言っています。

そして、「人類史的に言いますと、この『放牧と厩舎型の子育て』が今、初めてできなくなってしまい、子育てはひたすら厩舎の中で行わなければいけなくなりました。しかし、その厩舎では子どもに手伝わせて育てるということも減ってしまいました。元々は厩舎にいた父親が、今は単身赴任や夜遅くしか帰ってこない状況にあります。全面厩舎型の育児になったからといって、放牧して育てたような遊ぶ力、技、その器用さ、身体能力、社会性云々というものを育てなくてもいいかというそうはいきません。それらを放牧しないで育てなければいけなくなります。これは大変難しいことです。今の子育て支援も、現代的な放牧環境を何とか作り出すという視点を持たなければ、すべてを親がやらなければならなくなってしまいます。これは元々無理なのです。そして今、厩舎がゆとりのないものになっています。厩舎のゆとり、豊かさを取り戻すことを応援することです。」と言っています。

次の図11と図12の資料からも読み取れるように、子育て世代の女性の受けたことのある支援、役に立った支援に、『特になし』の次に多いものに『親子ひろば、子育てひろば等の地域子育て拠点』が挙げられています。**家庭の中だけでは子育てが難しい、子育て世代が誰かに助けを求めている現状が読み取れます。汐見氏の言う「厩舎のゆとり、豊かさを取り戻すことを応援すること」の大切さを改めて感じます。**

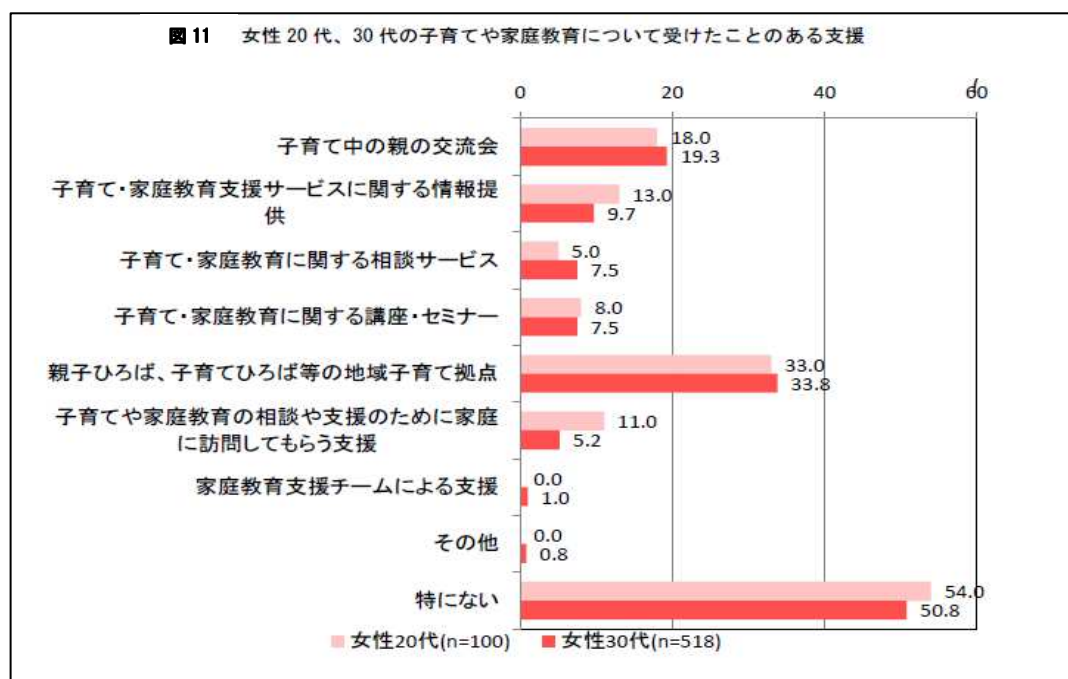
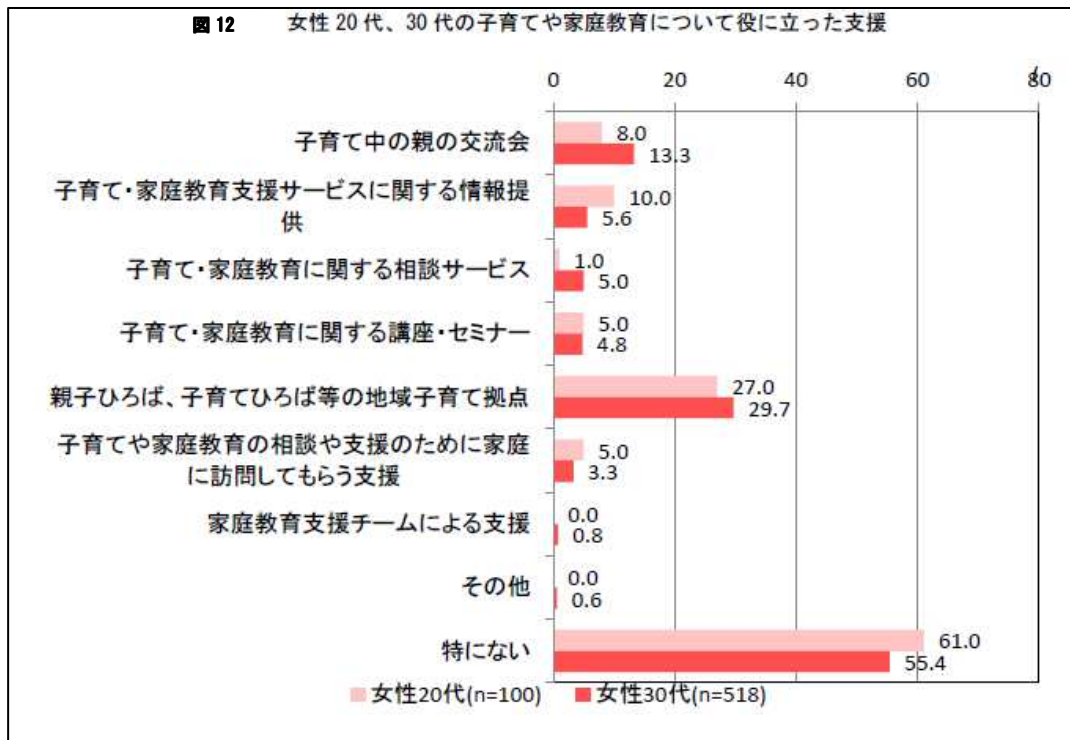


図 12 女性 20 代、30 代の子育てや家庭教育について役に立った支援



<文科省資料 平成28年度「家庭教育の総合的推進に関する調査研究～家庭教育支援の充実のための実態等把握調査研究～」より>



【５】 あきる野っ子を育てる「郷育」の実現に向けて

「子どもの成長に関する地域の役割と現状」の中にもあるように地域やご近所付き合いの希薄化や、「子どもの成長に関する家庭の役割と現状」の中にもあるように、子どもが小さいうちに、大人と関わる機会が徐々に減ってきている等の問題の提起がされています。

少子化、高齢化、核家族化の増加、情報の過多等に伴い、地域との連携も薄れ、地域の安全も失われています。当然そこには子どもの安全も失われていきます。

挨拶をすることで、地域のコミュニケーションを活発化し豊かな人間関係を築くために子どもたちだけでなく、地域の大人同士も率先し、挨拶をすることで、地域の連携感を強め、安全で住みやすい地域づくりを進めていく必要があります。

今や、公立の小学校、中学校にとどまらず、高等学校の一部、大学等でも、市町村のバックアップを受けて挨拶運動に取り組んでいます。これは子どもと大人が地域の中で交流し、顔の見える地域づくりを進めることです。また、これが子どもたちを地域の大人たちが守り、育てる「郷育」です。

挨拶は人と人、人と地域を結ぶ潤滑油として切っても切れない要素です。

挨拶のメリット

- ・挨拶のメリットを最大限使う。挨拶をされて悪く思う人はいない。
気持ちいい、笑顔になる、会話が出来る、お金がかからない。
- ・挨拶を続ける事の良さを習慣づける。
- ・学校安全ボランティアを含む地域の人と顔なじみになる。
(何か異常があっても、助けやすくなる。助けてもらいやすくなる。)
- ・地域行事に参加がしやすくなる。
- ・一部犯罪抑止力になる。

１． 大人が手本のあきる野市

子どもは大人をよく見ています。子は親の背中を見て育つと良く言われますがそのとおりと感じます。それが、親、学校、地域の大人達です。昨今、親の働く姿等、見る機会が少なくなっています。

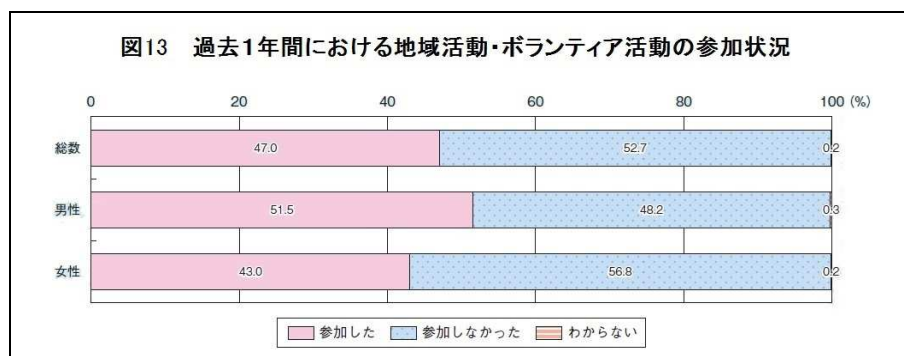
家庭以外場で大人と関わる場所は、地域と学校です。地域では様々な年齢層を持った方と接する事で生活や働く様子を見る機会が増えます。また、子どもたちも家族以外の大人から声をかけられる事で安心感につながることでしょう。

あきる野市も、各学校の、PTA、青少年健全育成地区委員会、町内会、自治会連合会等の連携を持ち、地域のコミュニケーションを活発化し豊かな人間関係を築くために子どもたちだけでなく、地域の大人同士も率先し、挨拶をする事で、地域の連携感を強め安全で住みやすい地域作りを進めていく必要があります。

前述の通り、ここでは多くの地域のボランティアの方の協力が必要になりますが、実態はどうなのでしょう。また、参加するための、環境はどうなのでしょう。

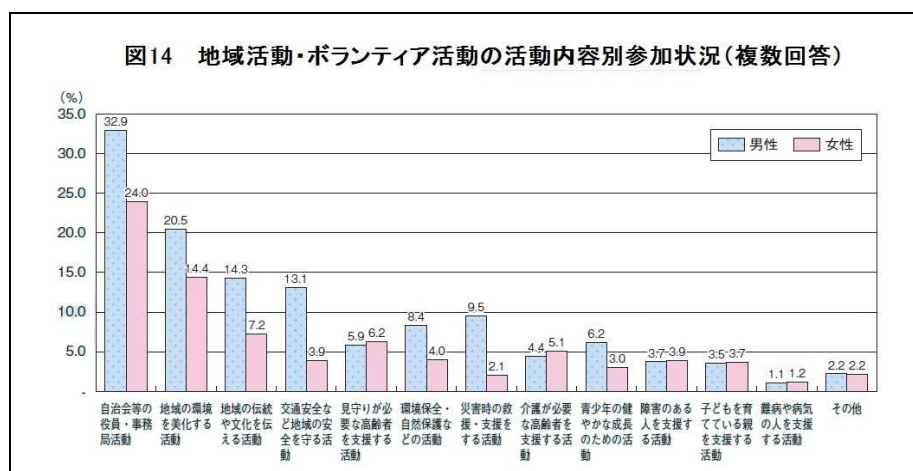
2. 高齢者の地域活動やボランティア活動への参加状況と参加率

就労と並んで高齢者の活躍が期待される地域活動やボランティア活動の参加状況を見てみると、図13によれば、60歳以上の高齢者のうち過去1年間に何らかの活動に参加した人の割合は47.0%（男性51.5%、女性43.0%）と、**5割弱が地域活動やボランティア活動に参加しています。**



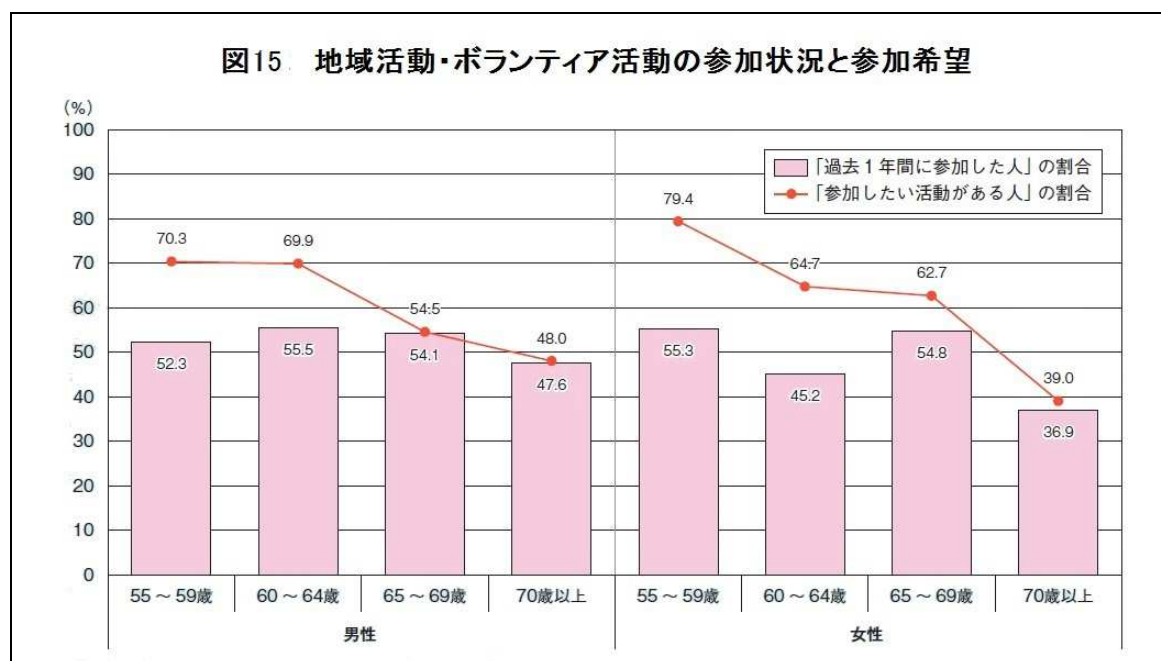
<内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」(平成23年)より>

活動内容別の参加状況を見てみると、図14によれば、男女とも「自治会等の役員・事務局活動」（自治会・町内会・老人クラブ・NPO団体等の役員・事務局活動）が最も多く（男性32.9%、女性24.0%）、これに次いで「地域の環境を美化する活動」（男性20.5%、女性14.4%）、「地域の伝統や文化を伝える活動」（男性14.3%、女性7.2%）となっています。また、これらのほかに特に女性に比べて男性が多く参加している活動分野は、「交通安全など地域の安全を守る活動」や「災害時の救援・支援をする活動」であり、逆に男性に比べて女性が多く参加している活動分野は、「見守りが必要な高齢者を支援する活動」や「介護が必要な高齢者を支援する活動」となっています。



<内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」(平成23年)より>

次に、年齢階層別に地域活動やボランティア活動への参加意向と参加率を見てみると、図15によれば、「参加したい活動がある人」の割合（参加意向）は若いほど高く、50～59歳及び60～64歳では男女とも6割を大きく超えている。これに対し、55～59歳及び60～64歳で「過去1年間に参加した人」の割合（参加率）は、同年代の「参加したい活動がある人」の割合と比べて14～24ポイント低くなっており、特に高齢期に入る前の世代で、地域活動やボランティア活動への参加意欲が、必ずしも実際の活動に結びついていない状況が伺えます。

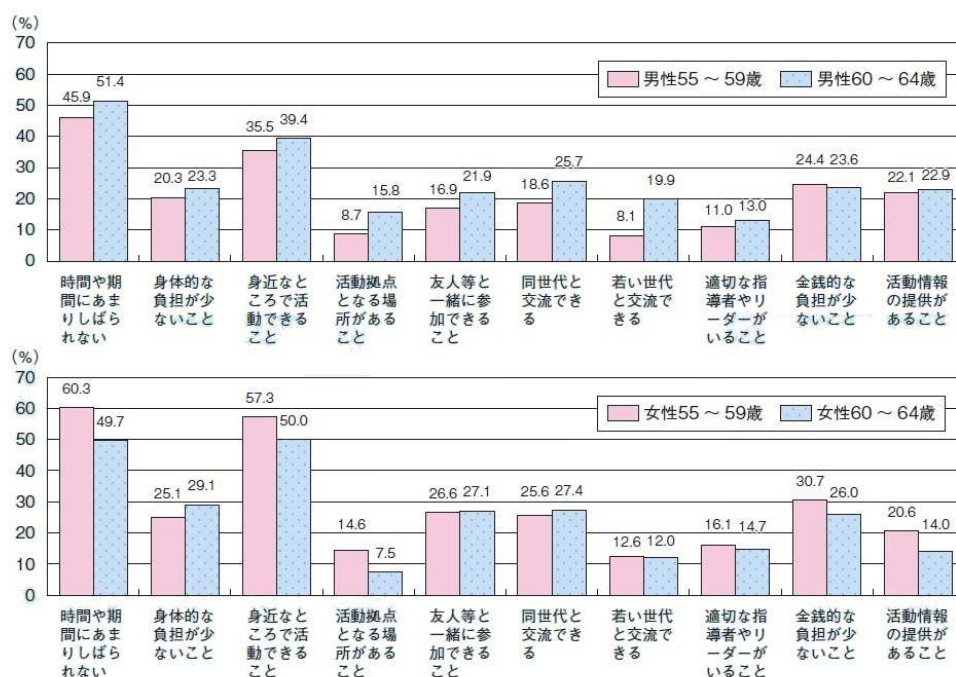


<内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」(平成23年)より>

3. 高齢者の地域活動・ボランティア活動を促すための環境整備

高齢者が社会的な活動を始めるためには、どのような環境整備が必要でしょうか。図16によれば、地域活動やボランティア活動への参加意向と参加率のかい離が大きい55～59歳、60～64歳について、「どのような条件があれば参加しやすい(したい)と思うか」(活動に参加する条件)を見てみると、男女とも「時間や期間にあまりしばられないこと」及び「身近なところで活動できること」を重視する傾向は共通しています。これに次いで多い回答は、55～59歳は男女とも「金銭的な負担が少ないこと」です。また、60～64歳の男性は「若い世代と交流できること」、「同世代と交流できること」及び「活動拠点となる場所があること」が55～59歳の男性に比べて7ポイント以上高くなっており、60～64歳の女性は「身体的な負担が少ないこと」が55～59歳の女性に比べて4ポイント高くなっています。60～64歳になると、男性は人との交流や居場所となる活動拠点を重視し、女性は同世代との交流や友人等と一緒に参加できることを重視するようになる傾向があります。

図16 地域活動・ボランティア活動に参加する条件(複数回答)



<内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」(平成23年)>より

こうしたことから、就業率の高い50歳代後半から60歳代前半の人については、まず**仕事と両立できる身近で時間に縛られない活動への参加を促す**とともに、地域活動等ができる時間を持てるよう、**仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)を推進**することが重要です。

そこで、一例として小学生の見守りボランティアを紹介します。これは、多くの団体が参加しているボランティア活動です。あきる野市には市立小学校が10校あり、平成29年4月現在の児童数は下記のとおり4,412人となっています。

また、児童の通学時の安全を見守るボランティアの方々が学校安全ボランティアとして、平成29年度時点で977名登録されています。

児 童 数	学校安全ボランティア数	ボランティアの構成団体
4, 412	977	町内会、防犯推進委員会、青少健地区委員会、民生児童委員、安全管理委員会、PTA、防犯パトロール委員、防犯協力委員など

学校安全ボランティアの方々は、毎日登下校時、街頭、交差点、危険個所に立ち、見守り挨拶を交わしています。おはよう、行ってらっしゃい、おかえり等、子ども達とも顔見知りになり、元気にいつも挨拶をする子どもが、元気がなければ「どうしたの？元気がないね」等と話しかける事もあるでしょう。また、子どもたちは、いつもの通学路でいつも

会う人（ウォーキング、犬の散歩、買い物等）なら認識できるでしょうが、普段見る事がない人から（地域の人でも）、声をかけられたら、危険と認識するかも知れません。普段、子どもたちは学校や教師から「知らない人から声をかけられたら、逃げる事」と指導を受けているかも知れません。確かにそのような選択は間違っていないと思います。

学校安全ボランティアの方々やいつも会う人が、地域の行事（お祭り等）で中心的な役割を担っている人たちだったら、子どもたちも安心できると思います。また、その人たちと一緒に活動している地域の人たちも、安全な人と認識できます。別の日に道ですれ違っても、挨拶ができるようになるでしょう。

ある学校安全ボランティアの方から話を聞きました。

- * 中学生、高校生から、照れながら今も挨拶をしてくれています。小学生から顔を知っている子は大きく成っても覚えて居てくれると嬉しいです。
- * 子どもが思い切り楽しそうに話している声、小さな子どもが大きなランドセルを汗かきながら歩いてく元気な子ども達から元気をもらいます。
- * 元気一杯な子ども達の笑顔を見る事が幸せです。

このように、ボランティア活動中に子どもたちからあいさつをされることに、大きなやりがいや生きがいを感じている方が多いようです。それが長く続けてもらえる一因になっているのではないのでしょうか。

お父さん、お母さんは、地域の人に挨拶をしていますか？

お父さん、お母さんから、先に挨拶をしていますか。

大人が手本のあきる野市の項でも書きました。

子どもたちは、お父さん、お母さんを良く見えています。

お父さん、お母さんが、挨拶をしている人は、安全な地域の人です。これが子どもたちの挨拶の第一歩です。

小学校に登校するようになると、子どもの活動範囲は広くなり、大勢の大人と接する機会が多くなります。

一番最初に接するのが先に紹介した学校安全ボランティアの方々でしょう。自分の安全を見守ってくれる大人です。一緒に登校してくれる、お兄ちゃん、お姉ちゃんが挨拶をしているのを見て挨拶をするようになるのでしょうか。このようにして、周りの大人と挨拶の輪が広がっていきます。

挨拶を交わす事で、地域の皆様が顔見知りとなり、人と人がつながり、家庭や地域で、信頼関係が芽生えます。

【6】 おわりに

1. 国家百年の計は教育にあり

現代の子どもたちを取り巻く教育環境は、より豊かに、より高度になってきましたが、それでもなお人は一人で生きようにはできていません。他者とともに生き、他者との信頼や関係を構築し、社会で生きていくための力は、現在の学習指導要領で述べられている「知徳体」がベースとされる「生きる力」ではないでしょうか。そして、それらは学校教育だけで習得できるものではないと考えています。特に、「徳」に関する分野については、社会（その国、その時代）が理想とする公共性、普遍性のある人としての基軸であり、自己の基となる自己肯定や自尊心、自己有用などをいった、自分がこの世界で唯一無二の存在であることへの対内的な能力や、他者への寄り添いや思いやりで代表される対外的な能力であり、人が社会の中で他者と共に生きていくために必要な要素ではないかと考えます。

また、それらは昔であれば様々な大人とのつながりのある地域や三世帯同居であった家庭、異なる世代が交じり合った子どもたちの社会が存在し、その中で子どもたちは様々な体験をして学校では得ることのできない学びを深め、心身ともに成長してきました。子どもたちにとって、生活の多くの時間を家庭や学校の中で過ごすわけですが、その間に介在する他者との関係や時間も子どもたちの成長に非常に影響があることが分かりました。いわば、知らない・関わることのない人と出会い、そこからの学びや気づきを得る機会も、子どもたちにとって「育ち」なのではないでしょうか。

言い換えると、子どもたちにとって、私たちが一番身近な社会であり、社会で生きていく手本なのです。

2. つながること、それがあきる野の「地域力」

だれもがそれぞれの立場で次代を担う子どもたちを豊かに育むために努力する社会に変わっていくために、自らの考えや行動が未来に向かう光であることを認識し、一人ひとりが「できるときに、できることを、できる限り」実践をすることが必要だと考えます。ここ近年発生した国難を乗り越えてきたのも国民一人ひとりの実践が積み重なった力であり、地域の課題を自分たちの力で解決し、目標を実現して行く、地域活動の適した時期に来ているといえるでしょう。

私たちは、まず自分自身のこれまでの生き方を振り返り、社会の中で育て、生きてきたその能力や一人ひとりの生き様を地域に戻すことは、市民の力となり、地域の力になっていくことでしょう。そして、新たな自己の存在意義を見つけ出して欲しいと考えています。大人同士が互いに手を携えながら、あらゆる人たちとともにあらゆる人が「生きていく力」を育んでいかななくてはなりません。だからこそ、地域や家庭に存在する様々な課題を解決する一つのチャンスが「人とつながる」ことであり、その具体的な実践として、**本提言書では、市内の小中学校において展開されている「あいさつ」運動を中心に、地域全体で「あいさつ」**

が広く普及されることを強く提言します。

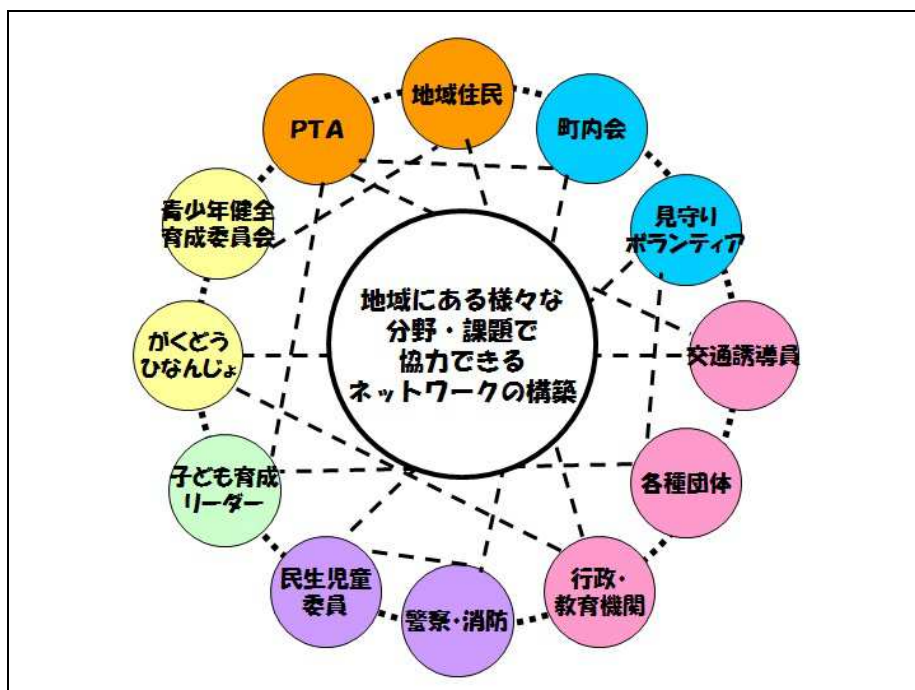
そのためには、子どもや地域の未来を憂い、子どもたちの誇りとなる故郷「あきる野」の香りの実現に向けて、子どもを活動対象としている様々な団体が一堂に会し、様々な情報共有や連携構築に向けた取り組みから、より幅広い世代による組織的、広域的な運動を展開することができます。

地域・伝統文化・伝統芸能・地域教育など人のつながりが残るあきる野だからこそできる未来への一步として、だれもがまちづくり・子どもの育ての主演となり、夢を実現していきましょう。

3. あきる野の「地域力」のこれから

ここ3期の提言書の策定に当たり、見えてきたのは、「この地域の多くの人々は、まだ地域や人とつながりあう気持ちがあり、それがこの地域の魅力のひとつである」ということです。地域力について、平松守彦元大分県知事は「地域が持つ潜在力」としています。大都市のような華やかさや発展的な設備はそれほどあるわけではありませんが、**人と人が織り成す信頼関係、共に生きて行こうとする共助の意識、地域課題を解決する自発的な組織の運動**といった、「**地域力**」がここには「ある」ということに目を向ける時なのです。

地域防災、地域福祉などが拓がるこの地域だからこそ、ここに生きる高齢者による経験や知識を地域の文化や伝統として伝承することから創出される**地域価値**や、家庭と学校の間に存在する地域に暮らす人が子どもたちと関わり合う**地域教育**が、この**あきる野の香り**ではないかと考えます。



＜子どもたちを支える関係団体の将来的な連携体制＞

**あいさつでつむぐ
人のつながり、
子どもたちの笑顔、**

**豊かな自然と人が織り成す
それはあきる野の香り**

人とつながり、共に生きていく

**あきる野っ子の未来は
あなたの一歩、一語から始まります。**

資 料

第１１期あきる野市社会教育委員の会議 審議経過

開催日	会議名	会場	内 容
平成２８年 ６月 ３日	社会教育 委員の会議	市役所 ５０４会議室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
７月 １日	社会教育 委員の会議	市役所 ３０１会議室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
８月１６日	社会教育 委員の会議	市役所 ５０３会議室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
１０月 ６日	社会教育 委員の会議	あきる野ルピア 産業情報研修室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
１１月１４日	社会教育 委員の会議	あきる野ルピア 産業情報研修室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
平成２９年 １月１９日	社会教育 委員の会議	市役所 ３０１会議室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
５月１６日	社会教育 委員の会議	あきる野ルピア 産業情報研修室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
６月２７日	社会教育 委員の会議	あきる野ルピア 産業情報研修室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
８月２２日	社会教育 委員の会議	市役所 別館第１会議室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
１０月１７日	社会教育 委員の会議	あきる野ルピア 産業情報研修室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
１２月１２日	社会教育 委員の会議	あきる野ルピア 産業情報研修室	・第１１期の研究テーマについて意見交換
平成３０年 ２月１４日	社会教育 委員の会議	中央公民館 第７会議室	・提言の内容・構成について
３月 ９日	社会教育 委員の会議	市役所 ４０１会議室	・提言のまとめ

分科会：１月１６日／あきる野ルピア、２月８日／あきる野ルピア 編集会議：４月１６日／市役所

第 1 1 期あきる野市社会教育委員名簿

氏 名	構 成 の 範 囲
えんどう ひろたか 遠藤 裕孝	学校教育関係者（小中学校校長会会長・南秋留小学校） 任期：平成28年5月～平成29年4月
そ が ゆうじ 曽我 有二	学校教育関係者（小中学校校長会副会長・五日市中学校） 任期：平成28年5月～平成29年4月
もり しんじ 森 真二	学校教育関係者（小中学校校長会会長・前田小学校） 任期：平成29年5月～平成30年4月
かわすぎ みのる 川杉 稔	学校教育関係者（小中学校校長会副会長・増戸中学校） 任期：平成29年5月～平成30年4月
なかざわ かつじ 中澤 克二	社会教育関係者
いしづか ようこ 石塚 葉子	社会教育関係者
みぞぐち まさえ 溝口 正恵	社会教育関係者
きし とよこ 岸 豊子	家庭教育の向上に資する活動を行う者
みうら さちこ 三浦 佐知子	学識経験のある者
えんどう りゅういち 遠藤 隆一	学識経験のある者
あ べ よしのり 阿部 良則	学識経験のある者
うすい まさお 臼井 正夫	学識経験のある者

委員数：10名

任 期：平成28年5月1日～平成30年4月30日

第11期あきる野市社会教育委員の会議
だれもが主役のまちづくり（提言）
～人がつながりあう「地域力」が、
あきる野の香りがする「あきる野っ子」を育てる～

平成30年4月
あきる野市社会教育委員の会議